

## 〔研究ノート〕

## 震災救援の最前線に立った中学生たち（その2）

1925年北但震災における旧制豊岡中学生たちの  
救援奉仕活動の作文記録を発掘して

編著者 深井 純一\*

共同編集者 岸田 秀樹\*\*

本稿は北但震災時における旧制豊岡中学校生徒による救援奉仕活動の記録作文の紹介第二弾である。今回は特に、当時の豊岡中学校校長、目良徳造氏による交友会誌『達徳』第31号・震災記念号掲載の2篇の文書を掲載する。その意義は、5月23日の震災発生時から6月1日までの1週間に起きた出来事、特に生徒・職員による救援奉仕活動の概要が日付順に整理されていること、また学校と生徒たちとの連帯感を確認するための不可欠の資料となるであろうこと、にある。

キーワード：北但震災、旧制豊岡中学生、目良徳造文書、救援奉仕活動、作文記録、ボランティア

## 1 目良校長文書について

ここに掲載する旧制豊岡中学校の目良徳造校長執筆の2篇の文書は、いずれも同校の校友会誌『達徳』第31号・震災記念号に掲載されたものである。本稿収録に当たっては、別に残されている手書き原稿を基底としながら、掲載文をも参照した。

最初の文書「震災記念号の発刊に当たって校外会員諸君に」では、5月23日の地震による学校関係の人的・物的被害の状況と、同年11月1日現在における復興ぶりが述べられている。またこの文書では、復興過程で校長始め卒業生らが被災学生を救済するために行なった活

動について述べられていることが注目される。

第2の文書「震災時における職員・生徒の状況ならびに各方面から受けた同情について」は、5月23日の震災発生時から6月1日までの1週間に起きた出来事、生徒・職員による救援奉仕活動の様子が日付順に整理・記述されていることが注目される。

特に「通学生はまず帰宅して家族の安否を確かめ、家事に力を用い、なお余力があれば……被災者救援のため活動するよう命じて解散させ、寄宿舎生には……救援のためいつでも出動できるように用意して命令を待たせた」との記述は、地震発生直後、校庭に集合した全校生徒・職員を前に目良校長が行った訓辞の主旨であり、その訓示はその後の生徒・職員の団体的な救援奉仕活動の出発点となったものである。地震発生直後で多くの者が茫然自失の状態にあ

\* 立命館大学産業社会学部教授

\*\* 立命館大学非常勤講師

る時に、すでに被災者救援を念頭に置いていた目良校長の胆力と見識の高さには心底敬服するほかない。

また学校を拠点として順次企画された活動は、生徒たちの全ての作文を通読した印象では、多くの生徒の参加を得て実行されたようである。このことは、この文書が学校と生徒たちとの連帯感を示す上で、そして生徒たちの救援奉仕活動の概要を知る上で重要な資料であること、を示唆している。

なお後半の「各方面から受けた同情」の具体的一覧表は、本稿の表題・主題と紙幅との関係で、ここでは割愛した。（岸田）

震災記念号の発刊に当たって校外会員諸君に  
校長 目良徳造

母校第30学年第2学期の終わりにおいて、例により『達徳』第31号を発刊するに当たり、校外会員諸君にごあいさつ申し上げたいと存じます。

[ 中 略 ]

ご承知の通り豊岡町が非常な災害を受け、惨状は言語に絶するものがあつたにもかかわらず、母校は幸いにも損害の少ない方でありました。校舎は各棟ともに壁の大部分が破損し、しかも寄宿舎の食堂がいくぶん傾斜したのみで、建物の基幹部に損傷なく、職員はその家族を合わせて傷害を受けた者1人もなく、生徒は城崎町出身の第一学年原強造が、この日ちょうど病気で家で寝ていて圧焼死したのと、第2学年の1人が学校で、治療2週間を要する足部の負傷をした外には死傷はありませんでした。

しかし住宅の被災した者は、全焼が職員2、生徒81、用務員2、全壊が生徒11、用務員1、半壊破損は合せて127で総計は224名に上り、

当時の職員生徒数637名に対しては実に3割5分に当たるのであります。

震災当日は土曜日で、地震の発生はちょうど第4時限の授業が始まって10分間経過した11時10分であり、職員の大部分と生徒の全部は教室にいたのですから、もし校舎が倒壊したならば、どのような事態になっただろうかと考えますと、実に心寒い感じがいたします。

幸いにもいくぶんかの破損で済みましたので、激震後は直ちに応急処理を施すとともに、一般〔住民〕の救援に従事し、校舎および運動場は開放して被災者の避難所、救護班の本部、傷病者の收容所などに使用させましたので、5月31日まで臨時休業とし、6月1日から開校して授業を開始いたしました。その前後の職員生徒の活動の有り様や、各方面から受けた慰問や同情の状況は別に記した通りであります。

災害後一般にやや落ち着いたと思われました27日に、生徒の被災調査を行い、学用品や教科書などの不足になった状況を明らかにし、その補給の方法を考究し、学用品は見舞い金がありある様子ですから、それで購入して配給し、教科書は出版書店の寄贈を受けることにしました。こうして学用品・被服などの配給のため費やした金額は1,500円に上り、教科書の寄贈を受けたものも900冊、その見積価格約800円に上りました。

なおこれらの配給のみでは学資に不足を生ずる者があるかもしれないと思い、別に学資補給の方法について工夫し、しかも県当局に対して授業料の免除が行われるようにも申請して、この災害の打撃によって退学するような者が、1人もいないようにしたいと工夫したのであります。幸いに学資関係のみで退学した者はほとんどなく、ただ各種の事情のため、やむを得ず

退学した者が4名出ましたが、これは学校の手では救済の方法がない者でありました。別に被災のため京阪神の方面に転学した者が5名ありました。授業料免除も7月10日にその規程が発表され、それに基づいて申請した者のうち40名が、6月から来年3月まで免除されることに決まりました。

6月1日開校当時は在籍生徒600人中欠席36名で、約10日間はほとんど同様の状況でありましたが、その後ようやく減少し、6月14～15日ごろからは約20人となり、ほぼ平常の状態に戻り、引き続き学習に励みました。

[中略]

被災会員諸君の中には[高校・大学などの]学窓にあって就学中の方が多数ありますので、この度の打撃によって学資支出の方法に苦しみ、あるいは退学の悲運に遭う心配のある方もあり、また母校生徒中にも困難な者もあると言うので、京都におられる先輩諸君が主となり、東京方面の会員諸君と協議され、各方面に檄〔=呼びかけの文書〕を飛ばして賛成を求められ、有力な多数の会員諸君が発起人となって、被災学生救済会を組織し、広く校外会員諸君のご同情を仰いで、資金を集められたのはご承知の通りであります。その詳細は別に掲げている実行委員の報告に述べられてありますから、ご覧頂きたいと存じます。

[中略]

生徒は11月1日現在、第5学年68名、第4学年106名、第3学年117名、第2学年147名、第1学年149名、計587名であります。校舎は震災による破損箇所を夏季休業中に修理を加え、壁はほとんど全部塗り直し、ペンキもまた塗り替えましたので、本館や普通教室は見違えるくらい綺麗になり、非常に快くなりました。

運動場は前号に申し上げた通り13年度に拡張工事を行い、5,340坪の大グラウンドが昨年末に完工しましたので、本年3月に雪が消えるのを待って設備を完成し、5月17日に落成式を挙行いたしました。新運動場は野球場1、競技場1(200メートル円周トラック、100メートル直線コース、跳躍場・<sup>とうてき</sup>投擲場各2)、テニスコート3、バスケットボール・コート2、バレーボール・コート1があり、天気さえ良ければこれだけの運動は同時に練習し得るように設備いたしました。

この運動場の完成を機会として、富森徹五郎氏外12名の先輩が発起人となり、野球部後援会を組織され、資金を集めて寄贈されることになり、これによって当日は式後鳥取一中および京都立命館[中学]のチームを招いて試合をいたしました。この後援会を一層拡張して各種運動を奨励し、体育の充実を図るようするために運動部後援会とし、相当多額の資金を集めて下さろうと言うことになりました。彼の五月の23日午前に富森徹五郎、西垣次郎、瀧田虎之助らの4君が来校され、種々ご相談下さっている最中に激震に見舞われたのであります。

それで震災後の状況に照らして考え、この新計画はひとまず打ち切り、追って企図されることになりました。新運動場は運動のために使用するに先立って、この度の震災において被災者の避難所となり、救護班の本部となって、大いに役立った次第であります。

母校生徒の学習修養の状況につきましては、前号で申し上げた後は大体において良好でありまして、次第に改善されているように考えて喜んでおります。震災時には特によく救援のことに従い、まじめに熱烈に、しかもよく秩序正し

く、団体で活動しました。中には涙ぐましいばかりの働きをした者が少なくありませんでしたので、大いに意を強くいたしました。

震災後は一時いわゆる被災気分になって、規律節制などの点にいくぶんたるんだ様子も見えましたが、9月以後は再び大いに緊張してまじめに努力しております。この分が進めば再び諸君のご配慮を煩わせるようなことはないであろうと信じます。どうかご安心下さるようお願いいたします。以上をもってごあいさつに代えます。終わりに当たって校外会員諸君のご健康を祝します。

震災時における職員生徒の状況ならびに各方面から受けた同情について 目良徳造  
激震が襲来したのは5月23日土曜日の午前11時10分で、ちょうど第4時限の授業が始まって10分たった時であった。当時生徒はすべて教室で授業中であったが、各教員はそれぞれ直ちに生徒を校舎外に脱出させたので、それを運動場に集合させて人員点検を行うとともに、校舎の損害を調査した。

その結果、第2学年の生徒が1人足をねんざした外には、職員・生徒・用務員ともに傷害を受けた者なく、校舎は各棟とも壁に著しい破損を生じ、しかも寄宿舍の食堂が数センチ西方に傾斜したが、建物の基幹部には大きな損害がないのを確かめた。

しかし学校から遠望する小尾崎・新町あたりの民家には、倒壊したものや大きく傾斜したものが少なくなく、所々から砂煙が上がっている状況に照らして考え、災害が軽くないことを察し、25日まで臨時休業を行うことにし、全生徒に対して震災に関する必要な注意を与え、まず通学生徒には直ちに帰宅して家族の安否を確

かめ、家事に力を用い、なお余力があれば出て来て、被災者救援のために活動するように命じて解散させ、次に寄宿舍生徒にはなるべく速やかに昼食を済ませ、服装を整えて、救援のためいつでも出動できるように用意をして命令を待たせるようにした。

こうしておいて、職員に豊岡町付近の被災状況を視察させたところ、倒壊破損した家屋が甚だ多く、また火災が2～3箇所から起こったという報告を得たので、待たせてあった舎生に、帰宅を見合わせて居残っていた通学生を加えた約100人の生徒のうち、1～2年の幼弱な者20人ばかりを残して校内の警備に当らせ、その他の者おおよそ80人を約10人ずつの小班に分け、教職員引率の下に町内各方面に出動して救援に当たらせた。

これらの各班はあるいは有楽館付近に起こった火災の消防に努力し、あるいは永井方面や新町付近の倒壊家屋の下敷きとなった死傷者を救出して救護所に運び、あるいは郵便局付近に起こった火災の防火に懸命に努力し、あるいは各方面における民家の家財搬出に従事するなど、余震襲来の流言〔＝根も葉もないうわさ〕がしきりに行われる間にあって、皆危険と疲労とを忘れて活動した。

激震のため倒壊した家屋は永井の駅通りに最も多く、新町・滋茂・本町の一部にも相当あった。倒壊と同時に永井の有楽館付近および駅前、その他1～2箇所に火災が起こったが、幸いにもこれらは消し止めた。

そうしているうちに12時を過ぎてから郵便局付近に火が起こったが、これは容易に消し止めることが出来ず、たまたま東北風が起こって火は西南に盛んに延焼して進んで来た上に、4時近くになって宵田の一部からも出火し、つい

に宵田・中・滋茂・久保寺の各町全部と永井町の一部とを焼失して、宵田橋から小学校庭前に連なる堀と広場の一線でようやく食い止めたのである。

郵便局付近に起こった火災が、防火の力が及ばずにだんだん大きくなったところには、いったん帰宅した町内および付近村落の通学生徒で、自宅に大きな損害を受けなかった者が、多数来校して消防および家財の搬出に参加し、職員の指揮の下に懸命に努力したのであった。

これら救援に当たった教職員ならびに生徒の活動には、感動せずにはいられないものが甚だ多かった。あるいは自宅が焼失しようとするのにもかかわらず、これを顧みずに、他の消防に懸命の努力をした者もある。あるいは倒壊家屋の屋根を破って、下敷きとなった死傷者を救出し、滴り落ちる鮮血のために衣服を血染めにした者もある。あるいは1時間もの長い間、連続で手押しポンプを押して消防に努めた者もある。あるいは寺院の高屋根に登って、墜落の危険を冒しながら防火に努めた者もある。あるいは歩行に苦しむ老婆を背負って、久保町から神武山山上に至った者もある。

他人の家に行って家財の搬出に尽力した者などは、数えることが出来ないほどである。中でも有楽館付近の火災の消防に努めた後、永井通りの倒壊家屋の中から、傷害を受けた者を救出して小学校庭に運び、のち郵便局方面に行って消防に努め、その効果がないのを見てからは家財の搬出に従事し、午前11時半から午後6時まで、ほとんど短時間の休養もなく活動した一団などは、最も感動せずにはいられない者たちである。

しかしこれらの活動は大体は職員の引率の下に、団体行動で行われたのであり、職員はその

職責上自らは危険を冒して行動したが、生徒に甚しい冒険をさせないように監督注意したので、生徒の活動には特に飛び抜けた英雄的行動と言うべきものは少なく、比較的整然とした団体行動が至る所に行われたのであった。

生徒の活動については混乱の際であったから、当時は直ちにこれを明らかにすることが出来なかったので、6月1日授業開始の日において、全生徒に震災当日よりその日に至るまでの行動について、記憶するところをありのままになるべく正確、詳細に記させて[これが本稿掲載の作文『行動と日誌』として保存されてきた]、これを調査したが、これによって震災当日豊岡町において生徒の活動した状況を、数字で挙げるとおおよそ次のようである。

|                 |      |
|-----------------|------|
| (1) 消防に従事した者    | 58人  |
| (2) 救護に従事した者    |      |
| 1) 死傷者を救出した者    | 38人  |
| 2) 死傷者を運搬した者    | 39人  |
| 3) その他の救護をした者   | 25人  |
| (3) 他人の財物を搬出した者 | 189人 |
| 合計              | 349人 |

ただしこの総数は延べ人員で実人員ではなく、震災救援に活動した者の総数は、他人の財物を搬出した189人を実人員と見てよいと思う。これらの生徒は夜に入ってから皆引き揚げて来たので、付近の通学生は家に帰らせ、寄宿舍および遠方からの通学生は余震を恐れるので、止むを得ず寄宿舍の庭に畳を出し、露天に眠らせて休養させ、職員も全部在校して半数づつ交代して睡眠をとったが、この夜は熟睡する者はほとんどなく、職員などは全く一睡もしなかった者があった。

これは校庭および運動場が一般市民の避難所となり、夕刻からは寄宿舍炊事場も炊き出し本

部となり、救護班がその本部を運動場に置いて昼夜を問わず活動しているので、避難者を尋ねて来る者、負傷者を見舞う者などが途切れることなく来て、しかも当校を見舞うために来る者も多いので、これらの応接や案内に休む暇がないほどであったためである。

この夜種々考慮し、明日からは救援のために応分の協力をするとともに、学校としての善後策を実行することにし、大体の部署を定め、職員はそれぞれ分担して、昼夜ともに交代してこれに当たることにした。

24日は先述の寄宿舍生徒に、ひとまず帰宅して父兄の安否を問い、しかも各自の状況を報告し、26日午後1時まで再び帰舎するように命じて解散させた。そして通学生のうち登校した者約80名に、教職員の指揮に従い、被災者慰問のために来られた人々の案内に従事するとともに、職員は学校の被害状況の詳しい調査に着手したが、学校の慰問に来る者、避難者を尋ねて来る者、傷病者の見舞いに来る者が非常に多く、終日校内も運動場も混雑を極めた。この日から本県の衛生課、神戸市、第十師団軍医部、京都府、大阪毎日新聞社などの救護班に宿舍として教室を貸与したので、一層混雑を来たした。

25日は昨日の経験に照らして考え、昨夜中に計画を立てておいた通り、被災者避難先案内を作成することにし、早朝から10数名の職員と選抜した生徒30名とで着手した。すなわち職員生徒が10班に分れて、豊岡町付近にある野外避難者を歴訪して、その世帯主の被災前の住所と現在の避難地とを記したカードを作って整理し、世帯主名により「いろは」別に分類してまとめ、これを模造紙に書き連ねた。

午後3時になって出来上がったので、豊岡駅前

および本校前に掲示して慰問者の便を図った。掲示した世帯数は770であったが、被災者の慰問に来た人々は、これによって相当の便宜を得たようである。

なおこの日は学校の校舎・校具の損害額の調査をまとめることにし、おおよそこれを完了した。この日からは傷病者を柔道場に収容し、警官の一隊に講堂を貸与して宿泊させた。

26日は午後1時に全生徒が集まることになっているので、午前中はすでに集まっていた生徒を使って、前日のように慰問者の案内をさせ、別に約20人の生徒には豊岡小学校の校庭に設けられた救援本部に赴いて、配給係の配給品分配の仕事を手伝わせ、しかも建築係の連絡役として、自転車を持っている生徒数名を派遣して活動させたが、これは31日までほとんど毎日のように継続して行われた。

午後1時になって集まった生徒は約300名で、全生徒の約半数に過ぎないので、全部の状況を明らかにすることは出来なかったが、しかし震災地の状況を見るに、直ちに授業を開始することはとうてい不可能であると考え、5月末日まで臨時休業をすることに定めて、集まった生徒にこれを告げ、一場の訓話を行い、今後は家事の整理に急を要しない者は、毎日午前8時までに来校して、学校のため活動するように命じて、ひとまず解散させた。

この日午後には<sup>ちよくし</sup>勅使黒田侍従が、<sup>じしゅう</sup>震災地慰問のため差し遣わせられて豊岡に到着され、午後四時過ぎにわが校にもお出で下さり、校内柔道場や運動場の天幕内に収容されている傷病者や、講堂や運動場にいる避難民を、親しく巡視して慰問されたので、居合せた職員生徒一同はつつしんでお迎え申し上げ、聖恩に限りがないことに感激した。またこの日豊岡の被災地図

400枚を<sup>とうしゃ</sup>謄写して各官公署に送った。

27日は早朝から被災生徒について正確な調査をすることにした。豊岡5,内川1,城崎1,港1の8区に分け,職員生徒数名で調査隊を組織し,1区ごとに分担して各被災生徒の避難所を訪ねて慰問し,被災の種類程度,学用品紛失の状況などを調べた。

午後5時ごろまでに各隊が皆帰校したので,その報告をまとめたが,これによって生徒の住宅焼失者80名,倒壊者12名,大破者31名あるのを確かめ,しかも学用品教科書などを失った者も甚だ多いことを明らかにした。そこで直ちにこれらの生徒の救済方法について考究した末,学用品類は各方面の学校などから続々寄贈される見舞金で購入して給与し,教科書は発行者に頼んで寄贈を請うことにしてその手続きを進めた。

この日にはまた豊岡町内を実態調査して被災地図を作成し,<sup>とうしゃ</sup>謄写版によって多数これを作り,各方面に配布してその便宜を図り,また各方面から受けた見舞いの電報や手紙に対する礼状を発送した。

28日は震災地視察のため出張された菊澤文部書記官,ならびに震災研究のため来られた山崎理学博士が,早朝から視察のため来校された機会に,ちょうど集合時間で集まっていた職員生徒のために,特に一場の講話をお願いしたところが,非常にお忙しい日程であるにもかかわらず,快諾されて相次いで一場のご講話をして下さり,一同に大きな反省と感激とを与えられたことは,誠に感謝に堪えない次第であった。

その後職員生徒は前日のようにそれぞれ部署を定めて,校内の警戒や慰問者案内などに当たったが,この日から地理学・博物学〔=生物学・鉱物学・地質学の総称〕等の担任者や有志

の職員は,震災の研究に一層力を入れることにして,城崎・港方面に出張し,視察・探検・撮影などに大いに努力した。

29日から31日までは毎日同じように救援のために努力するとともに,校舎・校具などの応急修理・整とんなどを行い,授業開始の準備に努めた。

6月1日からは予定の通り開校した。出席生徒562名,欠席者36名であった。まず校庭に集めて一場の訓話をし,被災者の救済に関する方針を説明した後,全生徒に校舎内外の大掃除を行わせ,それが済んだ後に教室において,生徒の被災状況の再調査などを行い,その次に地震発生当時から31日に至る間の活動,特に23日中に行ったことについて回想して,出来る限り詳細に実際の活動を記し,しかも震災に関する感想や美談について記述させ,夕方に解散した。

こうして2日以後は全く平常通り授業を行った。10日ごろまでは欠席生徒数が30名以上の日が多かったが,その後ようやく減少し,12~13日ごろからは約20名となり,ほぼ平生の状態に復帰したのであった。

さて当校は幸いに損害が少なく,救援のためにもいくぶんかの活動をすることが出来たのであったが,事情が明らかでなかったため各方面に非常な心配をかけ,あるいは直接来訪され,あるいは電報または手紙によって安否を尋ね,慰問された方が非常に多く,誠に感謝に堪えない次第である。慰問のため直接来校された者170人,電報50通,手紙は400通に上った。特に感謝に堪えないのは,あるいは直接来訪され,あるいは他の方法で金品を寄贈される者が甚だ多かったことで,24日に20人の〔兵庫県〕柏

原中学校生徒が職員に引率され、缶詰などの食料品を持って慰問救援のため来られ、[京都府] 福知山中学校の職員・生徒の代表者が、見舞金を携えて慰問されたのを始めとして、各方面から非常な同情を受けたので、これを以下に列記して深い謝意を表したいと思う。

[以下、見舞金・品の寄贈者一覧表略]

以上の金品は皆ありがたく受領し、用途を指定されたものはその通りにし、その他は品物も寄金とともに主として被災生徒救済の資金に充当した。すなわち被災生徒のうち学用品・被服などを失い、急にこれ入手しにくい事情にある者を調査し、差し当たり必要な物は購入して、現物で配給した。その種類数量はおおよそ次の通りである。その購入費は被災生徒の救済金および無指定の寄贈金だけでは不足であるので、特に兵庫県教育会から震災義援金100円の分配を受けて補充することにした。

[以下、学用品・被服類の寄贈一覧表略]

この配給によって、被災生徒は不自由なく学習を続けることが出来たが、学用品および被服類とともに学習上欠かすことの出来ない教科書も失った生徒数70人、冊数900冊にも上ったが、これはすべて皆発行者の厚意によって寄贈を受けることになった。その詳細は次にあげた通りであり、その厚情誠に感謝に堪えぬ次第である。

[以下、教科書寄贈一覧表略]

以上北但大震災時におけるわが校職員・生徒の行動ならびに被災直後における状況を述べ、被災生徒の救済のため各方面から受けた同情の事実について、記して感謝の意を表した。なお震災に関する所感の〔うち〕述べたいものもあるが、これは他の機会に譲ることにする。

## 2 生徒の作文（続き）

「行動と日誌」として記述を求められた内容

一、地震が起こってから後、23日中にどんな行動をしたか。

二、24日から後、毎日どんな行動をしたか、順次に書きなさい。

三、地震が起こってから後、他人の行い、特にわが校の生徒の働きについて、感心したことをくわしく書きなさい。

### 行動と日誌 植木 忠

一、学校で解散して後、汽車の運行があるか否かを見に、京極道を通って駅に行った。駅で井上・足立・橋本君らに会って、真のスポーツマンシップを発揮しようと、家屋の下敷きになった人々を出すを手伝った。ちょうどその時新屋敷方面から黒煙が上がり、下流域域ははるか城崎と思われる所に、白煙が天に達していた。

3時発の汽車の運転も頼りないもので、井上・足立・その他小学校講習生と、線路伝いに江原に帰った。豊岡はなお盛んに燃えていた。途中国府附近で微震に出遭った。地震についての感覚が鋭敏になっていると思った。

豊岡では飯も食べそうになかったが、さすがに空腹を感じて江原で親類宅に寄って飯を食べ、5時40分の汽車を待って帰宅。家では養蚕時であることと、兄上が豊岡に救援に行かれたために忙しく、夜は子供を川原に避難させ、その他の者は柱の落ちそうな所にたんすなどを置いて寝た。

二、24・25日 兄上は豊岡行き。姉は床に就いており、家事の手伝いをした。

25日 九時の汽車で豊岡行き、中学校で作業を手伝った。

26日 6時の汽車で豊岡に来て救助を手伝った。

27日 城崎行き。午後帰宅，家事手伝い。

28日 家事の手伝い。

29日 九時の汽車で豊岡に来て，家より頼まれた台所用品を親類一同に分配。午後帰宅，家事の手伝い。

30・31日 家事の手伝い。

三，23日，他地方からの青年が手伝いをして  
いる時，〔本校の〕中学生が先生引率の下に救  
援に来たが，余り感心しなかった。25・26日，  
中学生が学校に来て色々手伝っていた。その  
他，地方〔から駆けつけた〕青年が大いに活動  
していたのには涙が出た。

### 感想と覚悟 植木 忠

今度の震災は我々にとって全く意外なものであった。地震に対する安全地帯と認識されていた但馬 - 実際僕らの地理の教科書にも書いてある - が，今度の震災後には学者の間で，この地震を当然のこととして論じられている。甚だ不都合千万なことである。

北但の震災の知らせが全国に伝わるや，<sup>かしこ</sup>畏くも皇室におかせられては御内帑金〔=皇室の所持金〕をお下しになり，黒田侍従をお遣しになつて震災の詳細をお聞き召され，また遠くは東京府・神奈川県から，近くは神戸・大阪・京都から，これほどに同情を仰ぐに至ったことは，全く恐れ入る次第であるが，一方我々がこの帝国の臣民であることは光榮の至りである。

我々はこの震災によって，生活上欠くことのできない精神的なあるものを得た。これは特別の訓練なしには，とても得ることの出来ないものである。遠く東京府・神奈川県から，このようにわざわざ救助に来るなどはこの精神がなくは出来ず，また東京・神奈川地方の中学校

から来た手紙は，1つとしてこの精神を奮起させないものはない。否，奮起させるために送ってくれたに相違ない。震災によって鍛練された精神，それはいかに根強いものであろうか。先ごろの古今未曾有の関東震災に比べれば，今回の地震は取るに足らないものであろうが，このように世間を騒がせたことに対して，あの大震災後1年もたたないうちに，新しい帝都を造り出した江戸っ子の努力の絶大なことに比べて，誠に恥じ入るのみである。

復興のノミの音は快く響く。江戸っ子が強いのか，神武山の下の子健児が強いのか。我々は元気を出して突き進み，勉学の傍ら，他のことを気にかけず復興の事業に努め，城崎・豊岡をより大きくするとともに，関西は言うに及ばず，全国的にこの中学校の名を揚げねばならない。バラックの下でむやみに救助品の配給を待たず，被災の心配事を悲しまず，聖旨〔=天皇のお考え〕を拝み頂いて精神的成功者とならねばならない。

### 行動と日誌 植坂 止

一，地震に遭遇，直ちに帰宅。家の中には入ることが出来なかった。夜は寝ずの番をした。兄は消防に行き，男は自分だけ1人。

二，24日 昨日の疲れで野外で熟睡した後は家の中の掃除。夜は家の中に寝た。

25日 学校に行き，在校生の被災調査のために星丸先生と玄武洞方面に行った。ついでに親類を見舞った。帰校後，避難先案内板の製作に従事した。保証人を見舞って帰った。

26日 学校に行き，午後職員室の掃除。その夜城崎に行こうとしたが，中止して小学校の本部の手伝いに行った。学校に

帰って病院に食料を持って行った。

27日 兄貴が応援に当町に来たから、代わって自宅にいた。

28日 学校に来てすぐ帰った。

29～31日 自宅にいて家業に従事。

### 感想と覚悟 植坂 止

去る一昨年の関東の大地震の揺れに伴う大火災に関して、その報道を毎日聞いてその状態もほぼ察し、大自然の威力を薄々は感じていた。しかし未だそれほどまでは感じておらず、重くは見ていなかった。

この時に当たり突如として、目前にこの光景を見せ付けられて、痛切に大自然の偉大さを感じた。山のかなたに白煙モウモウとして、「全滅!」「全滅!」の悲報は次々に来て、人はただ恐怖に駆られて何をすべきか分からなかった。平常どのように人類が文明・人格・道徳などを語ったところで、この大自然の前には何の用もなさない。ただ何の規律もなく多数の人が寄り集まっているだけだ、それ以上[の混乱]だ。こういう場合に人の真の価値が分かる。どれほど普段の修養があるかが分かる。

自分は震災に関しては何の後悔も覚悟も必要でない。ただ今まで自然を忘れて修養しようとして来たことに気が付いた。自分らは自然を友とし師として復興に努力し、なおまた文明・人格・道徳の建設に従わなければならないことを覚悟した。

### 行動と日誌 宇川太郎

一、わが家が半壊したから、家の品物の取り出しに尽くした。やがて下手から来た火のために、母屋・部屋・土蔵など全部焼失した。それ故に品物の整理に努めた。

二、24日以後も品物の運搬・整理、バラック

建設、移転などに努めた。その後の日は近所の人の移転や品物運搬を手伝った。

三、別に気が付いたことはなかったが、5年級の幹部連による見舞客の案内、また自転車などで走り回っている中に、見覚えある者を多く見かけた。

### 行動と日誌 鶴野勝之

一、11時12分の震災により学校を出て以来、自宅が心配になったので、郵便局に電話を掛けに行った。局へ行く途中、町家の破損したのを見て、初めて但馬の地震であって、他地方の地震ではないことを知る。長距離電話は不通。下宿に帰り、半時間の昼寝から目覚めると豊岡方面は黒煙が天を覆っていた。直ちに豊岡に来て友達や先生の避難を手伝った。幾度も流言に驚き、数回車に足を引かれた。夕方下宿に帰った。

二、24日 朝8時前に豊岡に来て城崎が全滅したのを初めて知る。あゝ数日前まで天下に誇った歴史のある古い温泉と、まだ見ていない全滅した城崎を思い比べれば、胸が詰まるような気がした。

自宅に電報を打った。余りの気の毒さに、お悔み申すことも出来なかった。午後、自宅に帰った。

26日 警察署発行の身分証明書を持って、やっと列車に乗れて、1時過ぎ豊岡に戻った。中学生の作った被災者案内を見て大いに感心した。午後4時過ぎ、自作の草花全部を切って知人を訪れた。

27日 学校に来て、営繕課長に付いて働いた。

28日 城崎の友を訪れた外、津居山に行った。

三、美しい行いと感じたことは、中学生の作った被災者案内。

### 感想と覚悟 鶴野勝之

グラッと来るとひとたまりもなく、山陰に雄を誇ったさすがの豊岡町ももう見る影もなく、青ざめた人々は広場へ広場へと集まった。思案に暮れた親、泣く子、子と呼ぶ声、それらが入り交って、まるで悪魔の快い私語のように聞こえた。

これに続いて起こった火災、炎々天を覆うほどの黒煙、見るだけでも寒気を感じさせられた。以前には何か天災があって学校が休みになることを〔期待して〕、友達とよく語りあったけれど、「健康を失って後、健康の尊さを知る」の例えから外れず、今はひたすら10日前の平和を請い願うことが甚だ大きい。

あゝひどい天災、何の罪があって天は我らを罰するのか、何の罪を責められ、幼い子らを殺したのか。それにしてもうれしいことは全国民の熱のこもった同情である。我々はその同情をどのような心をもって受けるのだろうか。特に関東地方に住み、我らと同じ道にある者〔=中学生〕からのやさしく心強い便りは、涙なしでは読むことが出来ない。心からの同情あふれる言葉は我らを慰め、心強い言葉は我らを励ますに十分である。

我らは生命がある。否、我らは生命があるのではなく、むしろ生命を拾ったのだ。これを不幸中の幸いとして、恵んでもらった同情と奨励とによって務めに励み、以前に勝る豊岡町を建設するとともに、この同情に報いるため、自分の義務を成し遂げなければならない。

### 行動と日誌 宇野 保

一、我々舎生は学校解散後直ちに昼食を済ませ、

各々街に応援に行った。自分は駅通りの消火に尽くし、父の無事な顔を見て安心し、滋茂町の原田呉服店に手助けに行き、その後滝田氏宅に行って手助けをした。その時は既に体が疲れて元気が出なかった。

神武山に上がって町を見下ろした時は、実際感慨無量だった。その晩は寄宿舍に入ることが出来ず、警戒をしながら一夜を明かした。

二、24日 朝、学校の倒れた戸棚を起こした。故郷が心配なので10時ごろ直ちに帰宅した。

25日 昨夜寝なかったので11時ころまで眠っていた。午後は散髪に行き、入浴した。

26日 親類が心配しているので、行って当時の話をして、まあまあ安心させた。

27日 豊岡に戻ろうかと思っていると、舎監から“当分の間休校する”との通知が来たので戻らなかった。

28日 見舞状の返事を5枚、29日同じく3枚、30日同じく7枚書いた。学校から通知が来た。

31日 午後1時、豊岡に向かって出発した。到着後、保証人を見舞った。

三、火事場で校友が一生懸命に働いているのを見ると、大変うれしかった。

### 感想と覚悟 宇野 保

震災に対して、安全地帯とまで言われていた但馬地方にも、どのような天の指図が悪神のいたずらか、大地震が突如として起こって来た。第一震の最初には地震であると感じず、黒板が落ち、皆がヤッと叫んで立ち上がったので、やっと地震であることを知ったくらい、〔当地方は〕地震のまれな所であった。

当地方の震災に対して兵庫県はもちろん、関

東の諸地方を始め各地方から、多大な義援金、および小さい物はバケツ・鍋・傘・下駄を始め、大きな物は布団・材木・テントに至るまで直ちに送ってくれた同情、ならびに各連隊・各地の青年団・在郷軍人・消防組の大きな働きぶりに、深く深く感謝せずにはいられない。

このような片田舎の地震ですら、このような悲惨な状況を示した。まして東洋第一の大都会である東京の、大震災の当時のことが思い出されて、被災者の胸中を十分に推察することが出来る。

本校にも寄宿舎にも、関東の未知の諸君から、熱烈な同情と激励のこもった手紙を頂いて、我らは非常に喜び、またその手紙によって復興に対する我々の決心は一層強固なものとなって来た。我ら中学生のその当時の行動には目覚しいもの、また感心するに値することもあり、地元の人にも好感を与えていると言うことである。この立派な精神を永続させたいものである。

地震は大して恐ろしいとも思わぬが、地震に付き物の火災が恐ろしいのである。地震に対する防御法としては家屋を完全にし、地震があったら直ちに飛んで出ることである。しかし慌ててはならない。物品に執着心を起こして、マゴマゴしていると大変危険である。

火に対しては、出来るだけ火の用心に努めることである。豊岡もただ1つの火元からこのような大きな火事となった。これだけのことを心得ていれば、大丈夫だと自分は考える。

被災者に対しては出来るだけこれを慰め、便宜を図ってやる必要がある。

### 行動と日誌 太田垣虔甫

一、学校で地震に遭い、帰宅した。自宅は第一震で倒壊していたが、幸い家族には傷害なし。

家族の者と舟に乗り<sup>たちの</sup>立野に避難した。家は火元に近く、2時ごろ焼失した。夜は立野に野宿した。その間、他人の荷物運搬の手伝いをした。

二、24日 立野の木本方に避難した。

25日 瀬戸・城崎方面の親類の見舞いに行った。夕方から本町に避難した。

26日 正午学校に集合し、その後小学校で慰問品配給に働いた。

27日 小学校で営繕課の手伝いをした。

28日 自宅の焼け跡の整理をした。

29・30日 避難所の修繕。

三、林田・谷垣・松本・中野耕らの働きぶりに感心した。

### 感想と覚悟 太田垣虔甫

僕がこの度の震災に当たって、屋外に飛び出すと直ちに感じたことは、自然の力がどれほど大きいか、そして人の力が自然に比べてどんなに小さなものであるか、ということであった。

数百年来あるいはそれ以上昔から休む暇もなく築き上げられ、繁華と美麗とを誇っていた豊岡町・城崎町一帯は、5月23日の数分間の大地の動揺、動揺というよりはむしろ<sup>またた</sup>大地の瞬きによって覆され、ついには残らず焼けてしまったのである。

世には地震に関する大学者も数多くいる。そして但馬地方はそれらの人々により、地震の安全地帯とまで言われていたのである。それが他の地方に先んじてこのような大災難を被ろうとは、夢にも思わないことであった。

しかし僕はこの際に、実際に人の性質というものがどれほど善良であるか、また人格というものは、どれほど明らかに区別されるものであるかを感じた。

見ず知らずの人、または日ごろその仲が悪く、口げんかの絶え間がなかった人にまで、自分の

貴い食料を分け与える人、他人の困っているのを見ては、自分の生命の危険を冒してまでもその人を助ける人、または自分の家は焼かれ、家族は傷付き倒れているのもそのままに、公のために尽くす人など、至る所に美談・善行が残されている。

僕はこれを聞き、これを見て、日本が世界の一等国として輝く訳も、この魂に存在していると考えた。

しかし人は、大事の起こった時には精神を緊張させるが、余りに緊張した結果、どうでもいいと投げやりな気持ちに陥りやすいものである。「宵越しの金を持たず」などというのはその一例である。それ故に我々はそのような気持ちに陥らず、有事の際にも公のために尽くす精神と体力とを作り、我々の成功の後には、家屋の建築にも十分な注意を注ぎ、自分の身の安全と人々の幸福・利益を図らねばならない。

### 行動と日誌 太田垣功

一、運動場に集合の後、一度下宿屋に帰り、安否を尋ね、その後親類に行こうとすると、はや親類の家は焼失したとのことで再び運動場に行き、その後目良校長宅の物品を学校に運んだ。それを終えて下宿屋に後戻りし、下宿屋の重要物品および自分の教科書などを中学運動場に持ち運び、夕食を終えてしばらくすると、故郷から兄が私の安否を尋ねに来て下さった。その夜は中学校の運動場で一夜を明かした。

二、24日 午前8時55分の汽車で故郷に帰った。その後は自宅にあり、平常の休暇のように過ごした。豊岡に行こうとしたが、〔満員で〕汽車に乗れず、家の人が止めたので行かなかった。

29日 朝、中学から書面が来て6月1日

より開校とのこと、付近の友達にも伝えた。

31日 午後2時の汽車で豊岡に赴き、下宿屋を片付けた。

三、中学校の生徒は別々に用事を務めていたので、これを十分知ることが出来なかった。朝鮮人がよく働いたことはうれしかった。

### 感想と覚悟 太田垣功

第4時間目、ちょうど国語で私が解釈をしている時だった。最初手が少し震えて本の字がチラチラしたが、別に気にも止めずに続けてやっていた。間もなく後の方で、足で床をたたくような随分大きな音がした。

いたずらをしている、今に先生が目をむくだろうと思って先生の顔を見ると、ポカンとして天井の方を見ておられたが、真っ青なむしろ土色をした顔でドアの外に出られたので、私も無意識に走り出た。運動場に出るまでどうして階段を下りたやら、どうしてここまで出て来たか、少しも分かっていなかった。

外に出て初めて地震ということを知った。はやその時にはあちこちで火災が起こっていた。学校〔の集会〕を解散して早速下宿屋に帰ったが、だれもいなかった。しかし家に余り異常もなかった。そこで親類に行こうとしたが、火の手は盛んに黒い煙を出して、とても行けそうにもなかった。再び学校の運動場に戻って、大の字になって寝ていた。ただ故郷のことが気にかかっ〔中断 記事欠落〕

〔震源については、城〕崎温泉だの、または生野鉱山の爆発だのと、漠然としていて確かな報道に接することが出来なかった。

余震を恐れていたが、決心して学校の裏手を持って駅通りに出た。あゝ大抵の家は倒壊あるいは半壊で、満足な家は本当にわずかしかなか

った。その中には雑談中あるいは食事中、そのまま〔家屋の下に〕敷かれている者がたくさんいた。どうして神でない身が、今日の午前11時12分に地震が起こることを知っているだろう。無理もないことだ。

私はこれらの死人を無意識に〔家屋の下から〕出した。私がなぜこんな恐ろしいこと、こんな汚ないことをやったか、今考えるとさっぱり分からない。しかし多くの人は何の考えもなく、ただ死人を引きずり出す。その何の考えもないことが、人間美であり人情美であり、いわゆる人の力である。

火はますます盛んに燃え、黒い煙が天を焦がすようであった。校長宅も危うくなったので、物品を学校に持ち運び、これを終えて初めて一片のパンにありついた。しかしこんなに腹が減っていたのに、少しもおいしく感じなかった。それは〔空腹を満たすこと以上に〕故郷に自分の無事であったことを知らせたくもあり、故郷の安否を知りたくもあったからである。

その夜故郷から兄が来て下さった。お互いに無事であることを知り、本当にうれしかった。兄は午前1時の汽車でひとまず家に帰って、私の無事を知らせてくれた。それでひと安心したもの、これからどんな大きな余震があるかと思えば、心配でならなかったが、不安に不安を重ねてその夜を明かした。翌日午前8時過ぎの汽車で家に帰った。

私らはこの天災において無事だった。私らは天の神様に感謝しなければならない。しかしこの災難の犠牲者のために、我々は復興が一日も早く来るように、努力しなければならない。それにはむやみに過去のことを悔まず、目の前のことからどしどしやって行かねばならない。

## 行動と日誌 小田良一

一、地震が起きると直ちに駆け出て、先生の命令のままに運動場に集合した。校長その他の先生の注意を聞いて、かばんを抱えて直ちに豊田町の下宿屋・岡方へ帰った。下宿の人々が危ないと言うので、弁当だけ持ってまず保証人・辻徳方を訪ねた。

直ちに運動場に引き返し、運動場で早昼を済ませた。大部君と目坂を回り、本町方面の被害を見に出かけた。小学校の運動場で女学校の先生に捕まり、頼まれて直ちに駅通りの倒壊家屋の下になっている人々の救助に行った。一つ屋根に多くの者が上がるのもどうかと思って見物。その後1軒の家の屋根に上り死人出しを手伝った。すると養源寺の方面が火事とのこと、直ちに徳田・丸地両先生に率いられて、(約15名余りが)火事場の救助に出かけた。5～6軒は少々手伝ったつもり。(初めのうちは平井・友田両君と一組になっていたが、後にバラバラ)

つらくなったのでブラブラ駅通りに出て、下宿屋に帰った。火の手が間近に迫って来始めたので、さっそく荷物を整えて同宿の弟とともに、中学校の廊下に持ち運んだ。その時体はグタグタ。

後はだいが安心して火事場見物。中学校に行ったり、裁判所に水をもらいに行ったり、運動場に行ったり、フーラフーラ歩き回った。晩飯はいつ食べたか知らない。水がなくて弱った...。1時すぎブラブラ下宿屋に帰って、台所にやっと寝た。眠ったのは約1時間足らず。

二、24日 豊岡を9時に出発。徒歩で郷里久美浜へ帰宅。(12時着)土蔵のひさしが壊れたのを少し整理。バラックに就床。

25日 前日と同じ作業。

26日 あまり働かずに家で就床。夜中に強震の異変。バラックに移って就床。

27・28日 何もせず家で就床。

29・30日 父の代理で葉書を書いた。

31日 1時半久美浜を出発、4時過ぎ豊岡町着。下宿屋のいつもの2階に就床。

三、火事場で無理に家財を出させて、大半を焼いてしまった人があった。あの大火の初めごろ、消防隊の不活発であったことにはあきれた。火事場に中学生がたくさん来なかったのを恨んでいた人があった。5年1組の北條君が火をくぐって親類の家の家財を取り出し、その後も火事場の作業やけが人出しに尽力していた。友田・平井両君も火事場で非常に尽力していた。

#### 感想と覚悟 小田良一

今回の震災に当たって、僕は人間の弱さをときめんに感じた訳である。まずあの23日午前11時10分、グラッとやって来た時、〔黒板が落下して〕黒板掛けの弱さを知り、先生は一言もなく先に飛び出され、折り重なる級友、階段から滑り落ちる者、その慌て方は - 実は僕もそうだが - まあ普通ではなかった。

校門に出て尻細小尾崎裏手の2～3軒が、ペシャンコ〔になっているの〕を見て、実は夢ではないかと手をつねって見たのだ。運動場に集合した時、だれも彼も一時恐怖症にでも掛かったように、口々に何か声高にしゃべっていた。

帰宅を許されると、僕はひどく困った。でも夢の中に包まれているような脳髄・心臓を運んで、豊田の下宿・岡宅に帰った。「2階に上がるな」と言う。皆オドオド顔だ。

しかしおじいさんの落ち着いた様子は、日ごろの余りの頑固ぶりを忘れるくらいうらやましかった。弁当だけ持って出て、保証人の辻徳方を訪れたが、余りの慌て方にすっかり参って、

飛び出して学校に引き返した。そして運動場に出て、セメント塀に腰を下ろして弁当を食べた。

途中で揺り返しを食らって、オドオド弁当箱を抱えて砂利の上に引っ越して、やっと食べ終わった。そして僕は考えた。この地震の公平この上もないのに - しかしある程度まで - 感じ入り、人間の欠点を嫌になるほど見せつけられたように感じられて、しょうがなかった。

少したって大部君と本町回りをして小学校庭に出てみた。重傷を負った人々が運ばれて来る。彼ら負傷者の心を考えて見た。彼らのうめきは夢中である。痛みの外、何も考えていないのだ。正気に返った時の悲哀はどれほどだろうか。

避難民の間を縫って、ふと北側の田の中に北條君を見た。彼は避難する女の人に「もう1つ取って来るわ。大丈夫だ!!」と言いつつ飛び出した。後で聞けば、女の人は北條君の親類で、その家はあの時有楽館横手にあって、火に包まれていたのだそうだ。北條君の勇氣、人間の変わりようの大きいことに、僕はただ感激した。

以後約3時間、負傷者を救い出し、火事場の家々の荷物を運び出すのを手助けし、ゆっくり考える暇もなかった。

ただ消防夫の活動は不十分であった。口八飲み、口八食い〔ただ飲み、ただ食い〕は知っていても、あの場合をわきまえないような活動ぶりには驚いた。いくら団体的訓練が乏しいと言っても、あのざまは何であったか。

またあの際だから土蔵の中に運び込んだにせよ、いち早く家財の最も重要な物、震災後なくてはならない物は運び出すべきであった。

しかもどうであるか。僕の手伝ったある1軒の家などは、火が目前に迫っているのに、土蔵から出すわ出すわ、あらゆる物を門の前の道に

出した。そうしてその家の若衆が車を呼びに行っている間に、家財の大部分は火に包まれていた。「あゝ！」ただこれだけの言葉しか出ない。

前に消防夫の悪口を吐いたが、ここに感謝しなければならないのは、中町方面に火が移った時分から、家財運びの手助けがより一層敏活にうまくなったことと、宵田橋附近の防火への尽力ぶりは涙のにじむほど麗しいものがあったことである。

翌24日、朝鮮人人夫の麗しい活動に多大の感動を与えられ、郷里久美浜の被害が意外に、

全町に甚しく行き渡っていなかったのに喜ばされた。以後新聞・葉書・手紙・慰問団・慰問品を見て、種々様々の感慨があったが、余りに長くて述べ切れない。ただ余りに慰問隊・慰問品に頼り過ぎる様子が、時々一部の人々の間に見えて気持ちを悪くした。

今後の覚悟としては、「何と言っても天災だから」とむやみにかこつけ、なすり付けて、だれ切って気を落とさないことだ。僕の今後の覚悟は、ただこれあるのみだ。

Students Who Participated in Relief Activities after a Disastrous Earthquake (Part2):  
Discovery of a Collection of Essays on the Hokutan-Earthquake of 1925  
by Students of Toyooka Middle School .....

Jun'ichi FUKAI \*

Hideki KISHIDA \*\*

Abstract: This paper is the second part of the introduction of essays on the Hokutan Earthquake by students of Toyooka Middle School. This time we will introduce two acknowledgements by Tokuzo Mera, who was a principal of T.M.S., which appeared in the old boys' magazine "Tattoku" No.31 (a special issue in memory of the Hokutan Earthquake). From a essays, we can gain a better understanding of the relief activities from May 23 to June 1 of the students and the school staff, and see the strong bond between the students and the school.

key words: Hokutan Earthquake, Toyooka Middle School, Relief Activities, essays by students of Toyooka Middle School, two acknowledgements by Tokuzo Mera

---

\* Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

\*\* Part-time Lecturer in Ritsumeikan University